

## 「故郷」でシンポジウム ～「主体的な学び」のためのやりくり～

藤原一恵

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: fujiwara\_kz@fuzoku.tottori-u.ac.jp

**Kazue FUJIWARA (Tottori University Junior High School): Symposium in "Kokyo"—Making ends meet for "independent learning"**

**要旨** — 「主体的に対話的に学べる授業づくり」に継続して取り組む中で、生徒の力で作品をより深く読み取るためにシンポジウムを行った。教材は「故郷」である。シンポジウムに向けての生徒と教師のやりくりやシンポジウムの様子、またその学習の成果を紹介する。また、3年間継続して担当した生徒との積み上げの効果についても、3年前の実践と比較し紹介する。

**キーワード** — シンポジウム, グループ学習, 言葉の見方, 読み方

**Abstract** — While continuing to work on "creating lessons where students can learn independently and interactively," a symposium was held to help students read the work more deeply. The teaching material is "hometown." We will introduce the student teachers' efforts toward the symposium, the state of the symposium, and the results of their learning. In addition, the effect of accumulating with students who have been in charge for three years will be verified in comparison with the practice three years ago.

**Key words** — Symposium, group learning, how to read and read words

### 1. はじめに

#### 1.1. 国語学習の課題

今年の COVID-19 感染症流行により、世の中は大きく変化した。これから更に予想困難な時代を迎え、その中で社会を担っていく子どもたちには、急速に変化を遂げ続ける社会状況に柔軟に対応していく力が求められていることをより強く感じる。

そのため、何事に対しても主体的に考え、行動できる力や、多様な見方・考え方をする上で、よりよい選択ができるスキルが必要である。多様さや複雑さに対応できる柔軟性を身につけた大人として、社会を担ってもらいたい。だからこそ、身につけるべきは「言葉の力」だと考える。「言葉の力」によって自分を表現し、他者と共感し、協力し乗り越えていくことができるのだ。

そのような状況下で、国語教育として求められているのが「主体的に、対話的に学ぶ」ことだ。特に、日常のコミュニケーションの場で必要とされるのは、「話す・聞く」力である。「A 話すこと・聞くこと (1) 聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分のものの見方や考え方を深めたり、

表現に生かしたりすること。

エ 話し合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫し、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合うこと。」(中学校学習指導要領3年「話すこと・聞くこと」)ができるような授業を実践し、主体的に対話する力を備えたいと考えた。

#### ■1.2 生徒の実態

生徒は1年次から継続して担当した学年である。「主体的に作品を読み取り味わえる学習者」を目指して、1年次から3人のグループ学習や主体的に学ぶための単元学習～「話したい・書きたい」と思わせる仕掛け～(2019 藤原)に取り組んできた。昨年度のパネルディスカッションを取り入れた「走れメロス」の学習では、課題に対して相手意識を持ち、わかりやすい適切な表現をすることに継続して取り組んでいたことで「言葉を練っていく」経験を積み重ねることができた。パネルディスカッションでは、自分たちが考えたことが他のグループや異なる立場の人を納得させられたかという観点で、グループのメンバーと反省会をすると、メンバー同士でさらに見方・考え方が深まるような話ができる

ようになっていた。作品を読み込むことや、他者と自分の考えを伝え合うことでさらに、作品の世界に広がりや深まりを見つけることにおもしろさを感じている様子が見られる。「もっと話し合いたかった。」「自分も意見が言いたかった。」「他の人の考えを聞いて新しいメロス像が浮かんできた。」と言うように、生徒が「話し合うこと」に魅力を感じていることが分かる実践であった。こうした2年間の仕掛けのある学習の積み重ねにより、積極的に読む・書く・話す活動ができるようになっていく。

だからこそ、義務教育最後の年、読み手として主体的に作品と向き合い、筆者とも対話し、思いを読み取ることができるように、できなくともその方法を知って欲しいと考え、さらに主体的に読むための仕掛けがある授業実践に取り組んだ。

## ■2. 授業実践

### ■2.1 学習のねらい

「主体的に『魯迅の作品に込めたメッセージを読み取る』ための見方・読み方・考え方を学ぶ」ことが目標である。その学習の中で、主体的に人物を分析する、読み取ったことに疑問を持ちそれについて考える、他と意見を交換しながら自分の考えと比較し考えを深める、持論との相違点を見つけ質問したり回答したりする姿が見られる活動を設定した。

#### ■2.2.1 作品を読むための仕掛け

##### ① シンポジウム

昨年のパネルディスカッションでは発言できる人数が限られてしまい、生徒同士のやりとりから深まっていく感じが薄かった。話したい生徒も多くあったことが振り返りにも書かれていた。そこで、パネルディスカッションよりも多くの人が話し合いに参加し、意見交換や討議を行うことができるシンポジウムを行うことにした。(3年前の実践と重なる部分も多いので、比較しながら取り組みの効果も検証したい。)

##### ② 発問は2つ

シンポジウムのテーマは「『私』『ルントー』『楊おばさん』はどんな人物か」、「『月』『希望』

『道』にはどんな意味が込められているか」の2つとし、各クラス2回シンポジウムを行った。シンポジウム準備の授業では、全体への発問はこの2つのみで、シンポジウムで意見するために必要なことや、積み重ねてきた学習方法を活かすことなどの助言をすることに努めた。私にとっては、尋ねたいことがあふれそうになるのをぐっと我慢しなければならない時間となった。

#### ③ 「シンポジストは当日決める」

グループ全員で作品について熱心に話し合うために、人任せにはいけない状態を設定した。グループの中で誰がシンポジストを務めるのかを事前に決めてしまうと、当事者だけが話すための準備に専念してしまう恐れがある。3人が同様の熱を持って作品に向き合って読み取る姿を求めたためである。

#### ■2.2.2 学習過程(全12時間)

##### 第1次 作品の通読

・学習目標と学習予定の確認

##### 第2次 シンポジウムの準備

・人物分析

・抽象的表現の解説

##### 第3次 シンポジウム

1 「私」「ルントー」「楊おばさん」はどんな人物か

2 「月」「希望」「道」は何を表しているか

##### 第4次 魯迅のメッセージを読み取る

#### ■2.2.3 授業の様子と仕掛けの効果

##### ① シンポジウム

問いに対してどのような読み取りをしたのかを、各グループが発表のために意見をまとめなければならぬ状況が、生徒の意欲を向上させていた。グループごとの準備の時間は、真剣に言葉と向き合い、多様な見方から人物像をとらえようと話し合う姿が見られた。今までのグループ学習の中でも一番白熱した時間となった。

また、シンポジウムでは自分たちの意見が通じるのか、他グループと比べてどう違うのかに関心を持ち、積極的に質問回答をすることができた。作品の面白さに気づき、引き込まれていく雰囲気話し合いの場をより真剣な時間にしていった。

さらに、フロアからの発言が多く、パネルディス

カッションの実践よりも深い話し合いをすることができた。議論を重ねる中でシンポジウム1では、「どんな人物か」を考えるだけでなく、それぞれの会話から人物関係や、作品に登場している意義についての質問があり、有意義な話し合いとなった。

また、シンポジウム2では、「月」「希望」「道」とは何か、その根拠をシンポジウム1の内容を踏まえて発言していた。その様子を紹介する。

A: 「希望」というのは、登場人物の誰もが持っているものだと思うので、3人に共通している願いが「希望」だと考えられます。そして、3人とも今の生活に満足していないことも共通していたので、希望というのは、みんなが幸せに暮らせることだと思います。

B: Aさんの意見にあったんですが、「みんなの幸せ」とはどんなことですか？本文では「新しい生活」という言葉にも当てはまると思いますが、みんなの幸せが「新しい生活」だとすると、どんな生活を望んでいるのだと思いますか？フロアーのみなさんからも意見を出してください。

C: 私とルントーが隔絶してしまったのも、楊おばさんがひがみっぽい人になったのも、誰もが豊かに暮らせるような制度ができていなくて生活に格差ができてしまったことが原因だと思うので、納税の制度や、治安の維持など国の政治を見直してもらい、国民が経済的にゆとりある生活を送ることが必要だと思います。

D: 私がとても悲しそうに思えたので、大人になって隔絶してしまった私とルントーのようにならないで、どんな立場の人とも仲良くできることだと思います。

.....

B: 「多くの方が今よりよい暮らしをしたい」という希望を持っているということが分かってきましたが、それが「道」なるにはどうすればいいと思いますか？

C: 同じ気持ちの人たちと団結する

F: デモを起こす

.....

このとき、進行役(コーディネーター)を務めた生徒が、有効な発問や指名をしながら意見を引き出し、作品の主題に迫れるような流れを作っていた。細かな打ち合わせはなかったものの、昨年実践していたパネルディスカッションの際を思い出しながら、話し合いの舵取りを行っていたことに大変感心した。「シンポジウムを行う」ための準備や本番で

のやりとりは、作品に興味を持ち生徒達が、作品の主題や作者の意図を読み解いていくことに引き込まれていく、主体的で対話的な学びの中で、「他者の意見を聞き自分の考えを深めたり広げたりする学習」になっていたと感じた。

## ② 発問は2つ

「どんな人？」という問いは、それまでの小説文の学習でも繰り返し行ってきた。「人物に関する情報を集め多角的に分析する。なぜそうなのか？というプロットを立てて考える。」生徒は今までの学習の中でしてきたこと自然に取り組んでいた。また、抽象的な表現が何を表しているのかを考えることが「謎解き」をしているように、話し合いに熱中していた。そして、私自身が各グループの問いに対しての「読み方」が分かっているからこそ「シンプルな問い」が効果的なのだと感じた。

## ③ シンポジストは当日決める

この指示をしたことで、上手に発言していた友達の姿を見ているので自分がシンポジストになっても「堂々と語りたい」という意欲を感じた。だからこそ真剣に話をしながらメモをとることもできていた。議論の展開や、友達のつぶやきを記録しながら自分の表現に取り入れようという姿も見られた。実際にシンポジストを担当した生徒は皆、自分のワークシートのメモを見ながら話し合ったことを自分なりにまとめて発言していた。台本を読み上げているような生徒はなく、質問にも上手ではなくとも答えることができていた。

## ■3 成果と課題

### ■3.1 3年前の実践との比較

3年前も1年次から持ち上がった生徒と「故郷」のシンポジウムを行った。テーマは同じ、3人のグループ学習、人物を多角的に分析すること等、重なる部分が多くある実践であった。けれども、この度の実践では、以前よりもより深い読み取りが主体的にできていたと感じた。その要因をいくつか挙げる。

まずは、前に挙げた仕掛けの効果が大きかったことである。「主体的に学ぶための仕掛け」を3年間にわたって組んだ学習を重ねていたことで、自然と生徒には「主体的に」学ぶ姿勢が身についていた。「故郷」の学習では、問いが2つであったが、

学習予定を確認した後は細かな指示はなくても、今までの学習が読み取るためのプロトコルとして身についているため、ワークシートもほぼ何も書かれていないメモ用紙のようなもので充分であった。そしてそれは、指導者の机間指導時間を生み出してくれた。学習予定を確認した後は、各グループでシンポジウムに向けての読み取りとなるから、授業時間中は各グループの状況を確認したり、助言したりすることに専念できた。このことが、昨年度の実践の中で課題としていた「子どもたちの学びの過程を捉えてやれないこと、その変化や達成感を同時に味わえないこと」を解決する効果を生んでくれた。実際に、生徒の話し合いを傍聴し、進行状況やどこで行き詰っているのかを把握し、指示や助言をすることがじっくりとできた。生徒もグループで話し合いが止まってしまい、準備不足のまま当日を迎えることがなかった。

また、自ら「問い」を立てる読み方に取り組んでいたことも要因の一つである。3年次「握手」の読み取りとして、「ルロイ先生への『弔辞』(甲斐利恵子)を実践した際、人物を多角的にとらえる方法として「プロットを立てる」を学んだ。読み取った事実を「なぜ?」と考えることで、ルロイ修道士の子どもたちへの思いの深さや優しさが、より強いものであることが読み取れていた。この学習を活かして「ルントーはなぜ『旦那様』と言ったのか」だけでなく、「なぜ『私』は旦那様と呼ばれても、昔みたいに呼んでほしいとか言わないんだろう」→『私』の方も懐かしい故郷の人たちなのに、よそよそしい態度をとっているから親しい人があまりいないんじゃないか。」「やっぱり自分の方が上だと思っている?!」「故郷を離れるために来ているから、離れづらくなならないように気持ちを抑えているんだと思う。」というように、人物像を深く考えることに効果的であった。

### ■3.2 まとめと今後の課題

様々な活動が制限のある中であったが、充実した学習ができていた。1年次から継続して担当することで、計画的に着実にスキルアップすることができていた。生徒は様々な作品を読む中で、文章の読み方を身に付けることができて

いたと感じる。「故郷」の学習では、私自身が思い描いていた授業の光景がたくさん実現できていた。生徒たちは皆真剣に教科書の言葉に向き合い、活発に意見を出し合っていた。シンポジウムでは多様な考えに触れ、自分の読みを深めることができていた。また、シンポジスト・フロー・コーディネーターがそれぞれの立場で語り合うことができた。互いの言葉を真剣に受け止めてもっと広く深く読み取りたいという思いが伝わってくる話し合いになっていた。そして最後の「作者のメッセージ」では、シンポジウムを受けて自分なりに読み取った鲁迅の思いを書くことができた。

3年間の学習において生徒たちは立派な「読み手」として育った。それは私自身のやりくりだけでなく、生徒の意欲の高さのお陰である。常に前向きに取り組み、ともに言葉を楽しむ場として国語の授業ができたことに感謝している。

その意欲に反して、現代の子どもたちは生活経験が乏しいため、身の回りのことを段々知らなくなっている。季節や自然の変化やそれを表すことば、体験から表現できる言葉などが

今までで一番教科書を真剣に読んだと思う。人物分析をしたり、「月」「希望」「道」の意味を考えたりすることで作品のからくりを読み取ることができて面白かった。この作品は作者から見える景色や、頭の中の絵が対応している部分があり、そこでの変化が作者やルントーの変化に関係していたので、言葉の力はすごいと思った。どの作品にも作者が伝えたいことっていうのが必ずあると思うから、人柄や境遇や作者の表現の仕方をもとに作者が伝えたいことを読み取れるようにしたい。【生徒の振り返り】

子どもたちの中になくなってきているように感じる。授業の中で考えていることを表現する言葉がなかなか出てこなくて困っている場面を多く見かけた。読み取ったことをよりうまく表現するための語彙を増やす学習にも力を入れていきたい。また、そのための「仕掛け」のある授業を展開していきたいと考えている。

#### 参考文献

中学校学習指導要領(平成29年告示)文部科学省